

賢治詩の下書稿を朗読する試み

資料と報告

天 沢 退 二 郎

一、資料

(一) CD一点(本誌に添付)

これは二〇〇二年十一月二十七日に当研究所主催により明治学院アートホールで行われたイヴェントの、第一部の録音テープを若干切り貼りしてCD化したもの。第一部(ゲスト林洋子による文語詩朗誦)は割愛した。

(二) 詩「三三〇」の三声同時朗読用テキスト(本誌折込み挿入)

これは当日の配付資料に含まれていなかったもの。

「春と修羅・第二集」中の詩「三三〇」(うとうとするとひやりとくると)「下書稿(一)」の第一形態、下書稿(二)の

最終形態および下書稿(三)の最終形態を底本として、天沢が校訂・アレンジした。

二、報告

§1 なぜ下書稿を読むか。

そもそも、なぜ「下書」までもテキスト化するんだい？それは度の過ぎた特別扱いであり、《宮沢賢治》のいわゆる「聖化」のあらわれであり、作者にも(作品にも?)迷惑なんじゃないか？等々。こういった批判や揶揄はいまだに散見されるところである。

なるほど、「下書」は、発表準備段階としての清書稿や、そ

れを活字化した発表形（新聞雑誌掲載や刊本による）といったテキストからみれば、まだ作者自身それが人の目にふれることを予定する以前の、いわゆるアヴァン・テキストにすぎず、専ら好事家や熱狂的ファン、あるいはせめて作品の発想や成立過程を専ら対象とする特殊な研究者にとつてのみ、意味ある物件といえるかもしれない。

しかし、周知のように、宮沢賢治の詩や童話の大部分が、生前未発表・未整理の草稿として枕元に積まれて遺されたのであって、もし『下書なんぞ読ませるな』ということになったら、没後七十年の間に広く読まれてきた賢治テキストの大部分は読者の前から撤去され、生前刊行の『春と修羅』注文の多い料理店の二冊と、新聞雑誌発表の詩・童話だけ、せいぜい合計四冊の小じんまりとした作品集しか読めないことになる。そんなバカな話があるだろうか？

ということとはつまり、賢治作品の「下書稿」の価値は、七十年間の受容史によってすでに立証されてきたといえる。

さてその賢治詩下書稿の価値をも一つ具体的に言っておきたい。それは、賢治詩の推敲・改稿・改作という行為が、単に決定稿や完成稿の準備段階というにとどまらず、下書稿（一）、（二）、…（n）の、またそれぞれの第一形態、第二形態、…第n形態の、それぞれが魅力ある詩篇として成立しており、全体の移行経過そのものがドラマチックな作品となっている場合も少なくない。

§2 これまでの本文史と朗読

以上のような賢治詩の特質から、すでに没年の翌年に刊行のはじまった賢治全集の詩本文は、生前発表形のみならず、数多くの下書からの本文抽出によって構成され、とりわけ生前唯一の刊本『春と修羅』については、刊行後の自筆手入本に大幅に依拠するテキストのみによって構成されてきたほどである。そして、その言語的特質もあつてつとにレコード・テープ等によって試みられてきた賢治詩朗読は、今日にいたるまで、それら活字化されたテキストを、さまざまな工夫、技術、主観的参入によって、読み上げることに専念してきたといえる。

§3 なぜ、どのように「下書稿」を朗読するか

しかし、賢治テキストの大半は「下書」状態にあり、清書稿や刊本テキストさえ、さらなる推敲・改稿・改作によって、「下書化」されているのであつてみれば、これら「下書」の朗読という分野の探究は、賢治詩朗読にとつて不可避である。

ではどのようにすべきか？これには、さまざまなアプローチが考えられるが、ひとつ言えることは、アカデミックな生成研究や、成立過程研究に必ずしも縛られる必要はないということ。校本全集・新校本全集は、逐次形のうち最終形態を原則として本文化し、校異において、各次形態の成立過程をできるだけ厳密に記述してある。従つて、これに従つて朗読することも必要

かつ有意義な方法である。しかし、一枚の同一紙面に、いくつもの形態が重層しつゝ同居している場合、それらの形態は、必ずしも成立順に拘束されないいくつかの「流れ」を構成している。と見るときは、朗読はその「流れ」にそって発声していくことが認められてよいであろう。

また、それら何通りもの「流れ」が同一紙面上に同居しているといふことは、それらのテキストが同時性をもっていることを意味する。つまり、それらの詩句の声は、ポリフォニーであるといつていい。さらにこれを敷衍すれば、同じ作品番号をもつ詩篇の、用紙を異にする下書稿(一)(二)(三)……(n)の諸ヴァージョンもまた、同じ作品番号詩篇である以上、やはり全体として同時性を有し、ポリフォニーを形成している、と考えられる。

以上の考察にもとづいて、二〇〇二年十一月二十七日のイヴェントでは、「一六 五輪峠」の下書稿(一)の同一紙面上複数ヴァージョン、「三三〇」の下書稿(一)(二)(三)……(五)から抽出した三ヴァージョンの、それぞれ多声的朗読を試み、さいわい好評を得たのであった。(ちなみに当日の朗読者は発声順に石月麻由子「早稲田大学大学院生」、四方田犬彦「当研究所所長」、天沢退二郎「同所員」の三人である)

§ 4 今後の課題

ここで今後の課題を述べておく。「一六 五輪峠」の場合。

今回は下書稿(一)オモテの諸形態が、完全な独自体から、随行者の若者に対する二人称の語りかけへの移行を形成しているのを、同時進行的に多声朗読してみたが、紙面周縁部・欄外テキストのとくに書き出し部分が幾通りも試みられているのは、詩成立の試行錯誤と、話者の歩行の試行錯誤との照応であるとすれば、この箇所だけはさらに複数的朗読の多層化を工夫する必要がある。

「三三〇」(一)と(二)とするとひやりとくる」の場合。この詩はどのヴァージョンもすべて、二人の人物の対話形式になっているのを、今回はいずれも、それぞれを一人の朗読者による自演によって行ったが、各演者はこの二声性を必ずしも明確に使い分けていなかった。これは、すべてを別演者に配分するには $3 \times 2 = 6$ 名の朗読者を必要とし、これを同時進行させるには、さらなる演出の工夫と反復練習が必要となったわけで、当方にそれだけの余裕がなかったのだ。(あるいはむしろこれを、「七色の声」を持ったひとりの才能ある朗読者に任せて、三本の録音テープ、あるいはテープ二本と肉声との、同時進行にする手もあるか)

さらに、二人三脚的同時進行によって、ヴァージョンからヴァージョンへの横断的移行朗読も一案である、等々。賢治詩の下書群の属性としての多声性と、基本的な《詩人》のいわば一声性とを併せて、さまざまな朗読の試みを作品が待ちつけているのである。